

平成 21 年 6 月 4 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19830054

研究課題名（和文） 日本語教育と韓国語教育の協働による日韓交流授業に関する研究

研究課題名（英文） A Study of an intercultural class between Japan and Korea
—Cooperation of Japanese and Korean Language Education

研究代表者

澤邊 裕子（SAWABE YUKO）

宮城学院女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：40453352

研究成果の概要：本研究では韓国で日本語を学ぶ高校生と日本で韓国語を学ぶ高校生との日韓交流授業をデザイン・実施し、参加者を対象に行った自由記述型の事後アンケートとフォローアップインタビューの結果から、言語教育の枠組みの中で行う日韓交流授業の意義を検証した。調査の結果、言語面と文化面において自ら学習を深めようとする意識の変化が見られ、学習動機を高め、交流活動に積極的に関わろうとする態度を形成するなどの学習効果が期待できることがわかった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	740,000	0	740,000
2008年度	1,210,000	363,000	1,573,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,950,000	363,000	2,313,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：日本語教育・韓国語教育・協働・日韓交流授業・シラバス

1. 研究開始当初の背景

(1) 国際交流基金の『2006年海外日本語教育機関調査』の結果によると、韓国の初・中等教育段階における日本語学習者数は76.9万人であり、その大部分は高校で第二外国語として日本語を学ぶ学習者である。また、韓国との文化交流の活発化などを受けて日本の高校における韓国語学習者数も年々増加傾向にあり、近年10年間の間に学習者数が約4倍の伸びを示している。このことから今後ますます高校における韓国語教育が活発化し、指導法についての研究も進展していくことが予想される。

(2) 日本における韓国語教育、韓国における

日本語教育においても基準となる学習指導要領が掲げる教育目標には、コミュニケーション能力、文化理解能力の育成が挙げられており、共通の目標を持つ両言語教育が連携する意義は大きいと考えられる。

(3) 日韓交流授業は、社会科教育や異文化間教育の分野での先行研究はあるものの、言語教育の枠組みの中で実施された報告例はほとんどなく、その研究成果は韓国における日本語教育及び日本における韓国語教育に携わる教師にとって有用なものとなり、言語教育間の交流、ネットワークの形成に役立つと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、日韓の高校生を対象とする日本語・韓国語教育の枠組みの中で行う日韓交流授業をデザインし、実践して生徒に与える学習効果を明らかにし、日韓交流授業の意義を検証する。この結果を踏まえて日韓交流授業モデルを提案し、今後の日本語教育と韓国語教育のネットワーク形成に貢献することを目指す。

3. 研究の方法

(1) 日韓交流授業のコースデザイン・シラバス・カリキュラム策定

教師の裁量の自由度が高い正規授業外の時間における日本語コース・韓国語コースの開設の準備を進めるとともにシラバスデザイン・カリキュラムデザインを行った。シラバス・デザインに当たっては、韓国の日本語教育、日本の韓国語教育双方がそれぞれ基準とする学習指導要領から共通の教育目標を抽出した。

(2) コースの運営及び調査・日韓交流授業の意義の検証

日韓交流授業のシラバスに基づいて約1年間（4月から12月まで）宮城県内のM高校と韓国ソウル市内のS高校間において授業を実施した。コース修了後のアンケート及びフォローアップインタビューと、交流活動で交換した資料の内容を分析し、生徒たちがどのような気づきや学びを得たかを検討した。

4. 研究成果

(1) 成果1：日本語教育と韓国語教育の協働による日韓交流授業シラバスのプロトタイプ開発

①韓国における日本語教育と日本における韓国語教育のカリキュラム上の接点

科目目標、学習・教育の内容と方法における共通の指針については、「文化理解・態度の育成」「基礎的なコミュニケーション能力育成」「積極的に交流に参加する態度の育成」が接点として挙げられる。これらの目標は日韓の間に依然としてある相互理解不足を解消し、平和な未来の実現を目指そうとする共通の基本理念に基づいているものだと考えられる。さらに、学習・教育の内容と方法に関する接点は「生きたコミュニケーション活動と文化理解」「学習者志向・学習者参加型の活動」である。あらゆる方法で学習者の学習意欲を高める工夫を薦めている点も重要な接点である。以上のような教育指導要領の接点は高校における日本語教育と韓国語教育の協働による日韓交流授業を実施する根拠を示すものであり、シラバスのプロトタイプ作成の柱となるものである。

②日韓交流授業のシラバス[試行版]策定

本シラバスは、韓国の日本語教育と日本の韓国語教育カリキュラムの共通の指針の上に成り立ち、生徒の関心の高い話題とそれに関して情報や気持ちを伝えあうコミュニケーション機能を重視したシラバスであり、話題ベースのタスクシラバスを基本とする。

「ことば」「自分と身近な人」「好きなもの／人」「交流」「勉強／学校生活」「学校外の生活」「季節／天候」「伝統」「健康」「ニュース」「将来の夢」「流行」の12の話題分野に沿って行う交流活動そのものがタスクとなる。話題は生徒の関心や授業時間数などをもとに選択する。具体的には図1のように、話題に基づいて自分や自分の国に関する情報や自分の気持ちを伝えるリソース（素材）を日韓併記で作成し、交換してそれを教材として日本語や韓国語を学び合うというものである。図1に日韓交流授業のモデルを示す。

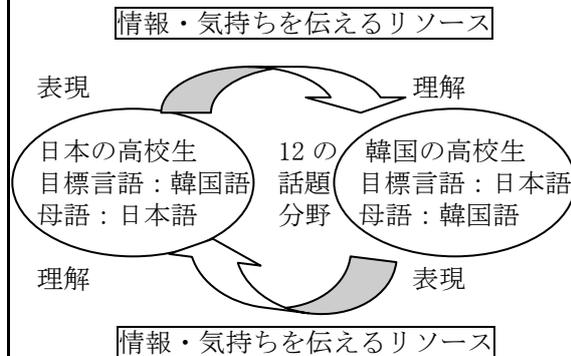


図1 日韓交流授業のモデル

2008年度に実施した日韓交流授業では「ことば」「自分と身近な人」「好きなもの／人」「交流」「勉強／学校生活」「学校外の生活」「将来の夢」の話題分野を採用し、リソースの交換や手紙交換などの交流活動を行った。

(2) 成果2：日韓交流授業の意義の検証

コース修了後に参加者20名（韓国14名、日本6名）を対象に自由記述型のアンケート及びフォローアップインタビューを実施し、その内容分析を行った。その結果、「文化理解・態度の育成」「基礎的なコミュニケーション能力育成」「積極的に交流に参加する態度の育成」という3つの教育目標に関して以下のような結果が得られた。

①文化理解・態度の育成

日本側の生徒は交流授業実施前、韓国に対して具体的なイメージがない、韓国の生徒は音楽やドラマなどの大衆文化を通して漠然とした興味を持っているケースが多かった。交流授業実施後は、同世代の、自分のパートナーとなった高校生の生活文化や考え方に

直接接触れ、自分たちとの相違点と共通点を知ること、「相手のことをもっと知りたい」「自分たちのことをもっとよく知ってほしい」と感じるようになり、情報交換を活発にするために日本語や韓国語の勉強を積極的に行うようになった。日本の生徒は後期に交流活動を通じて興味を持ったことについて一人一人が研究テーマ（「韓国の高校生の日本人観」、「韓国の生徒の儒教意識」など）を持ち、韓国語で韓国の高校生に質問紙調査を実施、研究発表をし、レポートを完成させるという活動を行った。さまざまなテーマを扱った研究発表を通し、相手の文化だけでなく、「もっと自分の国の歴史などについて知らなければならない」と話すなど、自文化の捉え直しや意識に変化が見られるようになった。

また、「日本では韓国語についてあまり習わないと聞いているが、学んでくれているのですごく嬉しい。韓国について関心を多く持ってくれて嬉しい」というコメントが韓国の生徒側から多く寄せられた。これらは韓国に対して無関心な日本人が多いというマイナスのイメージがプラスへと変化したことを示している。

②基礎的なコミュニケーション能力の育成

日本と韓国の高校生は、お互いの学習言語と母語の両方の言語で自分たちを伝える写真と説明付きの資料と手紙の交換を行っていた。互いに自分の学習言語は相手にとっての母語である。その学習言語で書いた資料や手紙に対するお互いの評価は「時々表記を間違えて書くときがあるが、よくわからないからなので、かわいい」「字が上手だ」「間違っている部分もあったが上手だ」「日本語がとても上手いことに驚いた」など、好意的なものであった。また、自己評価でも「ほんの少しずつだが韓国語が書けるようになり、日常会話も話せるようになった」「最初は文字を全く読むことも書くこともできなかったが少しずつ勉強していったら読めるようになった」のように、文字の読み書きや情報や気持ちを伝えるコミュニケーションがある程度できるようになったことを示すものが見られた。また、仕事の面接試験において1年間学んだ韓国語で自己紹介をして、面接官に高く評価され、試験に合格したという事例を報告する生徒もいた。このような実力が身に付いた背景には、「相手の国の友達がいなかったら、途中で挫折していたかもしれない」との生徒のコメントが示すように、交流授業で互いの学習を助け合い、励まし合った相手校のパートナーの存在が大きかったものと思われる。こうしたパートナーの存在が「もっと上手になってコミュニケーションを円滑にとれるようになりたい」という思いに繋がり、

学習動機を高めていたものと推測される。

③積極的に交流に参加する態度の育成

「これからも文通を続けていきたい」「相手の国に行ってみたくなった」など、1年間の交流授業終了後も、自ら交流活動を続ける意欲を示す生徒が顕著に見られた。日本側で高校を卒業した生徒がさらに学習を深めるため、自ら韓国文化や韓国語研究のサークル活動を始めたケースも見られた。相手の国の大学に進学した者や進学を希望する者もおり、言語面・文化面に対する関心の高まりは、授業終了後の積極的に交流活動に参加する行動に繋がっている。今後も追跡調査を継続し、交流活動での学びが参加者のその後の生活にどのように影響を与えるようになったかを調査していく計画である。

(3)得られた成果の国内外での位置づけと今後の課題・展望

本研究で得られた知見は、海外（韓国）の高校における日本語教育及び国内の高校における外国語教育（韓国語）が連携することの可能性の大きさを示すものだと考える。しかし、現時点では正規授業外の授業の事例しかなく、正規授業においてどのような日韓交流授業が可能かについては更なる検討が必要である。韓国と日本の学校制度には違いがあるため（学期の開始月や第二外国語の履修状況、履修者数など）、交流活動を円滑に行うために工夫しなければならない点は数多い。今後は、そのような解決すべき課題の検討も含め、本研究で実践した学校以外の事例も収集していく。そして国内の韓国語教育、韓国の日本語教育の教師ネットワークに本研究での成果を還元すべく、協働型学習を進めるための情報提供を行うホームページを作成する計画である。そうしたホームページを通して両言語教育のネットワーク形成に貢献していきたいと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 澤邊裕子

「高校における日本語教育のシラバスに関する一考察—学習者のニーズ・関心に配慮した実践的シラバス・デザインを目指して—」『日本語学研究』（韓国日本語学会）22号、pp. 15-26、2008、査読有

② 澤邊裕子

「高校生を対象とした日韓交流授業のシラバス開発に向けて－韓国における日本語教育と日本における韓国朝鮮語教育の接点から－」『宮城学院女子大学研究論文集』106号、pp.29-43、2008、査読有

③ 澤邊裕子

「韓日高校生間の交流場面における話題と語彙－意思疎通能力の育成を目的とした日本語授業のために－」『日本学報』（韓国日本学会）73巻、pp.65-78、2007、査読有

④ 澤邊裕子

「日本語教育と韓国語教育の協働による日韓交流授業－高校生を対象とした実践の事例から－」『日本文学ノート』42巻、pp.75-91、2007、査読無

〔学会発表〕（計 1件）

① 澤邊裕子

「韓国の高校における日本語教育のシラバスの問題点－学習者のニーズ・関心に配慮した実践的カリキュラム／シラバス・デザインを目指して－」韓国日本語学会学術発表会、2008年3月29日、建国大校

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤邊裕子 (SAWABE YUKO)
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号：40453352

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し